「男、突っ走る！」

第33回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内雅也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

木内孝志（48）　雅也の父

木内真保（46）　雅也の母

木内健次郎（15）　雅也の弟

眞榮田浩平（19）　名古屋芸術専門学校1年生

福沢瑞枝（19）　名古屋芸術専門学校1年生

長井夏美（19）　名古屋芸術専門学校1年生

加藤直也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

大久保正樹（23）　名古屋芸術専門学校1年生

植野雪奈（19）　名古屋芸術専門学校1年生

船倉篤志（19）　名古屋芸術専門学校1年生

奥村裕司（20）　名古屋芸術専門学校1年生

野添美南（20）　名古屋芸術専門学校1年生

山口拓海（19）　名古屋芸術専門学校1年生

安永和也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

1　木内家・全景（夜）

2　同・居間

雅也、孝志、真保が話している。

真保「最初の電話は、まずバスの衝突事故が起きたっていう報告で、詳細が分かったらまた連絡するって感じだったの。それでさっき、教頭先生から電話があって、バスに乗っていた生徒たちはみんな軽傷だったんだって」

雅也「じゃあ、大した事故じゃなかったんだ」

孝志「事故ったバスは、健が乗ってたバスだけだったのか？」

真保「うん。健は一組でしょ。観光バスは先頭を走ってて、交差点に入った時に信号無視をした乗用車とぶつかったんだって。相手の方も軽症で済んだらしいけど」

雅也「二組以降のバスは無事だったってわけだ」

真保「鞭打ちになったみたいで、健と何人か

は救急車で運ばれて、一応念のため検査したんだって」

雅也「健も災難だったね。そういえば、あいつ小六の修学旅行の時も、夜に体調不良で京都の病院に行ったことなかったっけ？」

真保「ああ、あったわ。担任の先生から、夜電話かかってきてた」

孝志「高校の修学旅行は、平和に行ってほしいけどな」

真保「行ける高校があれば良いけど」

雅也「どういう意味？」

真保「一年生も二年生も、健の通知表ひどかったでしょ。今年もあんな成績だったら、この辺の高校に行くことすら無理な気がして」

雅也「あいつが、どういう進路を目指すかで行きたい高校も変わってくるでしょ」

孝志「まあ、どっかの誰かさんみたいに、高校に入ってから進路変更することだってあるかもしれないけどな」

雅也「（苦笑して）まあ、その可能性もあるか」

3　名古屋芸術専門学校・全景

4　同・8階・プレゼンテーションルーム

雅也、夏美、瑞枝、裕司、その他の学生たちが、お化け屋敷の準備をしている。

瑞枝「大したことなくて良かったね」

雅也「まあね。でも、あいつにとってはとんだ修学旅行になっちゃったけど」

夏美「今朝の新聞に、バス事故の記事載ってたよ」

裕司「俺も見た」

雅也「そっか、二人ともエリア的に、地方版の記事同じやつ載るんだった」

と、拓海、直也、和也が入ってくる。

拓海「ねえ、これから段ボール箱取りに大須まで行くんだけど、誰か来れる？」

雅也「俺行く！　けどぐっち、大須までどうやって行くの？」
拓海「歩いてだよ」
雅也「え、大須ってこっから歩いて行けるの？」
直也「歩いて十分ぐらいで着くよ」
雅也「へえ。まだこの辺の土地勘があまりなかったから」
和也「お化け屋敷に使う段ボール箱、全然足りないんだ。うっちーも手伝って」
雅也「了解！　行きますか。（と夏美たちに）じゃ、行ってきます」
夏美たち「行ってらっしゃい！」

5　大須商店街

雅也、直也、和也、拓海が歩いている。
雅也「久しぶりに来たよ、大須商店街なんて」
直也「大須はいろんなところがあるからなぁ。結構な時間つぶしにもなるし、何かを作るうえでの良いヒントにもなるかもしれない

ぞ」
雅也「加藤君って、本当にいろんなこと詳しいんだね。イラストレーターのソフトの使い方も分かってたし」
直也「元々使ってたからな」
拓海「何か困ったことがあれば、加藤に聞くのが良いかもな」
和也「それは言えてるかも」
雅也「加藤君とぐっちは、いつから知り合いなの？」
拓海「体験入学何回も行ってたから、その時からかな。一泊二日のキャンプも一緒に行ったし」
雅也「何それ？」
拓海「高校生を対象にした一泊二日のキャンプイベントだよ。その時に、眞榮田たちもいた気がする」
雅也「だからみんな、オリエンテーションの時から仲が良かったんだ。俺は、ほとんど体験入学に来たことなかったから、当然最

初のオリエンテーションは知らない人ばっかりで、正直不安だった。同じ高校の子なんて、当然いないしね」

和也「俺も同じ高校の同級生いたけど、当時はお互い全然知らなかったからなぁ」

雅也「誰と同級生なの？」

和也「雑貨専攻の植野さん」

雅也「ああ、ゆきちゃん」

和也「知ってるの？」

雅也「新入生歓迎会の時に知り合って、たまに学校で顔合わせてる」

和也「そうなんだ」

拓海「まあ、そうやってこれからどんどん友達を増やしていけば良いんだよ。俺たちだって、結局みんな専攻が違うけど、お化け屋敷の実行委員会をやってるから、こうして仲良くなれてるわけだし」

雅也「ぐっちの言う通りかもしれないね」

と、段ボール箱の束が集まっている回収場までやってくる。

直也「よし、みんなで運ぶか」
一同「オッケー！」
と、段ボール箱の束を集め始める。

6　名古屋芸術専門学校・４階・４０１教室

浩平と正樹が、パソコンで映像編集をしている。

浩平「ああ、終わらん」
正樹「こっちもだ。この編集は面倒くさいぞ」
浩平「少し休むか」
正樹「そうだな」
と、夏美と瑞枝が入ってくる。
夏美「お疲れ、どう？」
浩平「今、一旦休憩」
瑞枝「それが良いと思う」
浩平「上の準備はどんな感じ？」
夏美「加藤とぐっちとやっすーとうっちーで、今大須まで段ボール箱取りに行った」
正樹「この間集めただけじゃ、足りんかった

か」

浩平「上の準備も当分時間がかかるだろうなぁ」

瑞枝「まあ、ギリギリまでかかるでしょう。準備していくうちに、あれが足りない、これが足りないって、出てくるだろうし」

夏美「仕方ないよ。学園祭の準備って、そんなもんでしょ」

正樹「ちょっと煙草吸ってくる」

浩平「俺も、ちょっと屋上の風浴びてこよう」

7　中学校・駐車場（夜）

乗用車の運転席で、雅也が待っている――真保と健次郎が助手席と後部座席に入ってくる。

健次郎「ただいま」

雅也「お帰り。怪我がなくて良かったわ」

真保「ごめんね待たせて。保護者説明会が長くてさ」

雅也「そりゃ長くなるだろうね。けど、別に

バス会社にも旅行社にも学校にも責任はないんでしょ」

真保「それでも、やっぱりどういう経緯で事故が起きたのかとか、ちゃんと説明しなきゃいけないし、生徒たちの怪我がどの程度だったのか、当日のスケジュールをどんな風に変更したのかとか、細かく校長先生と教頭先生が説明してた」

健次郎「物を拾おうと思って下向いた瞬間に、ガシャーンだったよ」

雅也「首痛くないのか？」

健次郎「まだ少し痛い」

雅也「まあ、すぐに良くなるでしょ」

健次郎「ああ」

8　名古屋芸術専門学校・5階・503～504教室

仕切りを片付けて、一つの大きな部屋となっている――テーブルに駄菓子を並べている雅也、美南たち。

雅也「これだけ駄菓子が揃えば、本当に駄菓子屋っぽく見えるね」
美南「何を仕入れようか、チョイスするの大変だったんだから」
雅也「ありがとう。助かったわ」
美南「お化け屋敷の準備も大変だったんじゃないの？」
雅也「だったというか、現在進行形かな。まだ準備が完全じゃなくてさ」
美南「良いの、向こう行かなくて？」
雅也「こっちの準備が終わったら、合流するよ」
美南「そういえば、駄菓子屋小説のほう、解決したの？　書き方に悩んでたみたいだけど」
雅也「ああ、あれね。堀江先生のアドバイスをもとに、一人称視点の小説に書き直した」
美南「それが良いよ。私も、一人称視点のほうが書きやすいって思うし。けど、駄菓子をテーマにした駄菓子小説を書くことには

なってたけど、まさか一つのお菓子じゃなくて、駄菓子屋を営むおばあちゃんの話にするなんて、さすがはうっちーだわ。私じゃ到底思いつかない」

雅也「駄菓子一つに絞ろうとしたよ。でも、何にもストーリー思い浮かばなくて。結局、俺の得意ジャンルのホームドラマ路線になると、駄菓子屋を営むおばあちゃんの話のほうが書きやすくてさ」

美南「うっちーは、その路線をブレずにしたほうが良いかもね。周りに流されて、変なジャンルに挑戦して苦戦するより、ある程度の得意ジャンルを突き進むほうが」

雅也「うん、自分でもそのほうが良いと思ってる。変にファンタジーとかＳＦを書くより、人間模様を描いた物語のほうが書きやすいしね」

美南「そうそう」

雅也「（駄菓子を手にすると）一個食べちゃおう」

美南「ああ！」
雅也「二十円、ちゃんと払う」

9　同・8階・プレゼンテーションルーム
夏美、瑞枝、裕司、和也、拓海、篤志、
その他学生たちがお化け屋敷の準備を
している。

裕司「何とか段ボール足りたね」
直也「そりゃ、これでもかってぐらい取りに
行ってきたからな」
和也「いよいよ、明日だね」
夏美「たくさん来てくれると良いけど」
瑞枝「先輩たちの話じゃ、お化け屋敷はここ
の学園祭の定番らしいからね。お化け屋敷
のメンバーだから、実行委員会の略称も当
時から『ばけめん』って呼ばれてるみたい
だし」
拓海「じゃあ、来年は俺たちがメインで仕切
るってことだよね」
篤志「まあ、そういうことになるだろうね」

瑞枝「ああ、人手がほしいわ。あれ、そういえばうっちーいないじゃん」
篤志「（拓海を見て）いるじゃん」
裕司「こっちは、ぐっち」
篤志「あれ？」
夏美「紛らわしいかもしれないけど、ここにはうっちーとぐっちがいるからね」
篤志「そういうことか。前におっくーに紹介された子じゃないなぁってずっと思ってたけど、そういうことだったんだ」
拓海「うっちーとぐっちがいるから、間違えないようにね」
篤志「うっちー、どこにいるんだっけ？」
瑞枝「多分駄菓子屋の準備してるから、五階じゃないかな」
篤志「分かった、ちょっと見てくる」

10　同・５階・５０３～５０４教室

駄菓子屋の準備をしている雅也、美南、その他学生たち――篤志が入ってくる。

篤志「失礼します。うっちーいますか？」
雅也「ああ、あつぽん。どうしたの？」
篤志「今って大丈夫？　ちょっとお化け屋敷の準備に人手が欲しくて」
美南「（会話を聞いて雅也に）こっちなら良いよ。ある程度はもう進んで、あとはポップ貼ったり、装飾するぐらいだから」
雅也「ありがとう。じゃ、お言葉に甘えて、上行ってくる。（と篤志に）よし、行こう」
篤志「オッケー！」
と、勢いよく出ていく雅也と篤志。

11　同・８階・プレゼンテーションルーム
雅也たちがお化け屋敷の準備をしている。

N「学園祭の準備はそれぞれに進み、ついに明日と明後日が本番となりました。準備最終日の夜のミーティングで、お化け屋敷の実行委員会は当日、朝七時に集合ということになりました」

12　矢場町駅・表（翌朝）

雅也が走っている。

N「朝七時に学校に集合ということは、逆算すると僕は始発電車に乗らないと間に合わないことが発覚。そのため、僕は五時起きで学校に向かっていました」

13　名古屋芸術専門学校・全景

『学園祭』の旗が掲げられている――

高校生や一般客が集まっている。

14　同・８階・８０１教室

雅也、瑞枝、裕司がお化けのメイクをしている。

雅也「どう？　怖い？」

裕司「良いようっちー、似合ってるね」

雅也「良かった。お試しメイクの時みたいに、京都の貴族って言われたらどうしようかと思った」

瑞枝「マロメイクでしょ。あれは面白かったわ。うっちーって癒しキャラだと思ってたけど、こんなギャグ的要素もあるんだね」
雅也「癒しキャラなんて言ってくれるのは、みずちゃんとなっちゃんぐらいだよ。それに俺、高校の時からこういうギャグ要員だったもん。そりゃ真面目な学級代表もやってたけど、普段友達と話すときはこういう感じだから、上手く使い分けてるの」
と、浩平が入ってくる。
浩平「そろそろお客さん入れるよ。（と雅也たちを見て）お、みんな良い感じだね」
雅也「眞榮田君も、映像編集ご苦労様でした。すごいよね、映像できる人って。俺なんて文章しか書けないから。使えるソフトだって、ワードとエクセルぐらいだよ」
浩平「うっちーもいずれ、いろんなソフトが使えるようになるって」
雅也「鈴本先生の授業は、話聞いて基本操作をするのが精いっぱいで、全然他の機能が

分からなくて。正直、パソコン使えるほうだって自分で思ってたけど、全然違うんだなって他のみんなの姿見て思い知らされたよ。クリエイターって、すごいね」

裕司「うっちーだって、そのクリエイターになるためにここに来たんでしょ」

雅也「まあ、脚本家もクリエイターみたいなものか」

瑞枝「これからは、いろんなことができるマルチな人が求められると思うから、スキルは多い方が良いかもね」

雅也「それは言えてるかも」

浩平「よし、みんな準備完璧だね。じゃあ、みんな所定の位置に」

雅也「オッケー」

瑞枝「よし、行きますか」

裕司「思いっきり脅かしてやろう」

と、談笑しながら出ていく。

15　同・5階・353～354教室

駄菓子が並べられており、美南たち学生が接客をしている――客がそれなりに入ってきており、駄菓子を選んでいる。

美南「さあ、いらっしゃいませ。美味しい駄菓子を揃えてますよ。駄菓子をテーマにした小説もありますので、お時間ある方はぜひご覧ください」

と、雪奈が入ってくる。

美南「いらっしゃいませ」

雪奈、駄菓子を選んでいく――テーブルに冊子が並べられていることに気が付く。

美南「（雪奈に）駄菓子をテーマにした小説を学生たちで書いたんです」

雪奈「そうなんですか」

と、冊子の中の一冊を手にする。『度胸をもって　作・木内雅也』と書かれている。

雪奈「うっちーも書いてたんだ」

と、読み始める――そこへ、お化けのメイクのままの雅也が入ってくる。

雅也「いらっしゃいませ」

美南「どうしたの、そのメイク？」

雅也「見りゃ分かるでしょ。お化けのメイクしてるんだよ。今休憩中で、駄菓子屋のほうどうかなと思って様子見に来たの」

美南「だからって、そんなメイクのまま来ないでよ」

雅也「落としてから、また同じメイクするの大変なんだから。この後、この顔のままお化け屋敷の宣伝でビラ配りしてくるから」

美南「よくやるね」

雪奈「メイクしてるから分からなかったけど、うっちーだったんだ」

雅也「ゆきちゃん、来てくれたんだ。ありがとう。良かったら、この後お化け屋敷のほうにも」

雪奈「うん。後で見に行くね」

雅也「あ、小説読んでくれた」

雪奈「うん。うっちーは、こういうホームドラマみたいなジャンルが好きなんだね」
雅也「まあね。こういうジャンルしか書けないんだよね」
雪奈「また新作書いたら読ませてね。楽しみにしてるから」
雅也「ありがとう」
と、雪奈が持っている駄菓子を見ると、
雅也「袋入れるね」
雪奈「ありがとう。（と並べられている駄菓子を持って）これもお願い」
雅也「はい、まいどあり」
雪奈「そのメイクでやられると、何だか面白いね」
笑顔で返す雅也。
N「楽しい時間はあっという間に終わり、盛況の中、二日間の学園祭は終わったのでした」

つづく